

ありがとうの道

コザ小学校 六年 地宮城 涼

「さあ。今日は、大朝だからさざえを取り
に行くぞ。涼も行くかい。」

歩きにくい。なぜこんな所を歩かないといけ
ないのか。僕は、涙が出るくらい怒っていた。
ぶつぶつ文句を言いながら歩いた。僕の背よ
りも少し高い草むらを両手でかき分けながら
歩いた。それが近道だとおじいちゃんが言っ
たからだ。そこには道がない。自分達で草を

かき分け草をふみたおしながら海までの道を
造っていくのだ。最初に歩くおじいちゃんは、
両手で草をたおし足で草が起きあがらないよ
うに何度もふみつぶす。僕は、その上を歩く
のである。それでもやはりつらい道づくりだ。
けもの道。動物が何度も踏み歩いたところ
のことを言うそうだ。そうやって動物達は自
分達の生活道を造っているんだと思っただ。
だむやみに動物達は、道を造っていないだろ
う。それは、自分達にとって必要だからだと

思う。

僕は、普段当たり前のようにほそうされた道を歩いている。家族は、当たり前のように入スファルトの敷かれた道路で車を走らせている。晴れた日、雨の日、風の強い日何にも気にせずに使っている。

夏の暑い太陽の下、道路工事をしている所を見た。アスファルトから湯気が出ている。工事現場の人は、汗だくになりながらむせるような臭いの湯気とガタガタと体中にひびき

わたる音の中で道づくりの仕事をしていた。

映画を見終わっての帰り道、何百メートルもある道路の工事をやっていた。お母さんが、

「道路工事の人達ねらいね。夜も寝ずに道路を整備しているんだよ。あの人達のおかげで、道が守られているんだね。」

毎日、当たり前のように歩いている道やいつでもどこにでもある道は、工事をしている大人の人達によつてほそうされ、守られているんだと気がついた。

僕は、他にも道路を守っている人達がいるのか調べてみた。道路で交通事故にあった人やねこの死体をかたずけるのは、環境衛生課で道路のゴミを拾うために道路清そう車を走せるのが維持管理課という事が分かりました。道ばたの花壇に花を植えるシルバー人材センターのお年寄り。道路のわきにプラントをおいて、四季折々の花をかざってくれる地域の人達がいる。そして、僕の住む自治会は月一回のクリーシダーに道路のゴミ拾いをする。道路を守りたい、きれいになりたいという気持ちをもった人が集まって僕達の住む沖縄の道路が守られているんだと分かった。それでも、いつまでたっても道路わきのゴミは減らない。残念だと思う。どうしてだろう。だれかがきれいにすればいいや、という気持ちがあるからゴミを捨てる人がいるんだろうか。僕は思う。だれかがではなくて、自分がかきれいにしなければと言う気持ちを持つことが大事だと思う。だから、僕はいつでも

気がついたら拾うことを実行したい。けもの
 道のように自分達にとって必要な道であるこ
 思いたい。

応募票

図画・作文

学校名	コサ	小学校	学 年	6 年
氏名	(ふりがな) いけみやま 涼	中学校	性	(男) 男・女
連絡先	(学校) 098-937-3249			
テーマ	河川・海岸・水・道路			
タイトル	ありがとうの道			